

## 縦にするか横にするか

桑原 正紀

アルファベットを作品中で用いるとき、それを日本語の流れに沿わせて縦にするかあるいは横にするか悩ましいときがある。「コスモス」八月号から。

「先生の声がいやだから」grammarの赤点とりし分けを言ひくる  
橘 芳園

あまやかな「GNP」に魅かれないブータンの動き  
藤田 倫夫

この二首は違和感なく収まっていることはいうまでもない。ただ詠草を見ると、ときどき「SAMMER」とか「Spring」といった表記があつて悩まされる。どこか違和感があるのだ。やはり単語（文はもちろん）のよるなある程度の長さを持ったものは横にしたほうが違和感がないようだ。ただし、あえて縦表記にして、ある種の効果をねらうといったケースがないとはいえないので、断定できないところではある。例えば「SAMURAI」などは日本語が英語文化に融け込んでアルファベット表記とな

ったわけだから、縦書きのほうがいかにもその雰囲気が出るであろう。

同じく「コスモス」八月号からと、吉川宏志の『夜光』から引いてみる。

上方のアクセントある穏やかさCOVID-19を語る山中教授は  
田村 悦子

泣きやまぬ赤子を抱けり秋のヘッドフォンからZARDが流れ  
吉川 宏志

田村さんの歌の「COVID-19」は「COVID-19」と表記する人もいる。「GNP」のように略称だからという考え方をすれば縦を選択しそうな気がする。これはどちらもありではなからうか。一方、吉川さんの歌の「ZARD」は固有名詞であるから横書きがふさわしいような気がする。このアルファベットの表記の問題は、ある程度の原則は守りつつ、一方で固定した考え方をするのは警戒しておくといった緩きが必要なのだろう。要するに一首の中でどう生かすかというバランスの問題でもある。いつか触れた漢字か平仮名かという問題同様、一首ごとのケースバイケースなのだ。

最近「まいだーん」というアラビア語のタイトルの同人誌が出た。「広場」という意味だというが、表紙のタイトルに並べられたアラビア文字が新鮮だった。「国際化」は短歌界にも着実に浸透しているようだ。